

連載：博物館と社会を考える

第3回

博物館の展示は何かを伝えるのですか？

林 浩二（千葉県立中央博物館）

何をもって博物館と扱うのかという議論はひとまず置くこととして、今回は博物館の展示について考えてみたいと思います。

博物館では、研究・展示・教育の専門職員である学芸員が、数ある資料の中から何を選び、どの順番に配置し、どのように見せるのかを決めますが、担当の学芸員が前面に出てくることは稀です。その例外の一つ、滋賀県立琵琶湖博物館（<http://www.lbm.go.jp>）の常設展示室のC展示室は、間もなく2015年11月8日をもってリニューアルのため閉鎖されます。



担当学芸員の顔写真入りのコメントの展示(滋賀県立琵琶湖博物館の企画展示「外来生物」。2003年9月9日撮影)

琵琶湖博物館は1996年10月に滋賀県草津市に開館しました。2016年の20周年を期して常設展示のリニューアル（<http://www.lbm.go.jp/renewal/index.html>）が始まり、常設展示室のうちC展示室の水族部分は2015年8月31日で閉鎖されました。残りの展示室も順次、閉鎖を迎えます。

琵琶湖博物館では、A（琵琶湖のおいたち）・B（人と琵琶湖の歴史）・C（湖の環境と人々のくらし）

いずれの常設展示室でも、その一部で、学芸員が前面に出ている様子やその様子が生々しく再現展示されています。

琵琶湖博物館の常設展示室の企画設計・施工の担当者による説明があります(鮫島泰平・清田真由美, 2000)。その中で、

「はみ出す展示」＝「展示内容物が枠や箱からはみ出た、展示造作の目立たないデザイン」

「学芸職員(注)の顔が見えてくる」ように・・・研究室そのものの展示

「博物館ができるまで」

などの記述が目をつけます(p.100)。そのようすを順に見て行きましょう。

A展示室の「湖のおいたちをさぐる」(<http://www.lbm.go.jp/tenji/atenji/guide/a3.html>)では、地質、魚類化石、植物化石、哺乳類化石のそれぞれの学芸員の研究室が再現され、採集してきた資料からどのように標本を、展示資料を作り出すのか、作業の途中が展示されています。机の引出を引き出すと、道具が並んでいたり、資料がはいついていたりします。そう、このコーナーでは一部の展示物に触れられるようになっているのです。表示に従ってデスクの上にある電話機の受話器を手にとると、学芸員本人が名乗った上で説明が流れたりもします。ただし、この研究室再現部分でそれぞれの方のお名前や顔写真を見つけることはできませんでした(わたしが見つけられなかっただけかもしれませんが)。博物館建設に先立ち、10か月かけて915メートルまで掘り、計測し、試料を採集したボーリング調査の現場事務所の再現展示については担当学芸員によってウェブページ(<http://www.lbm.go.jp/satoguti/chisoten/boring.html>)でエピソードが紹介されています。



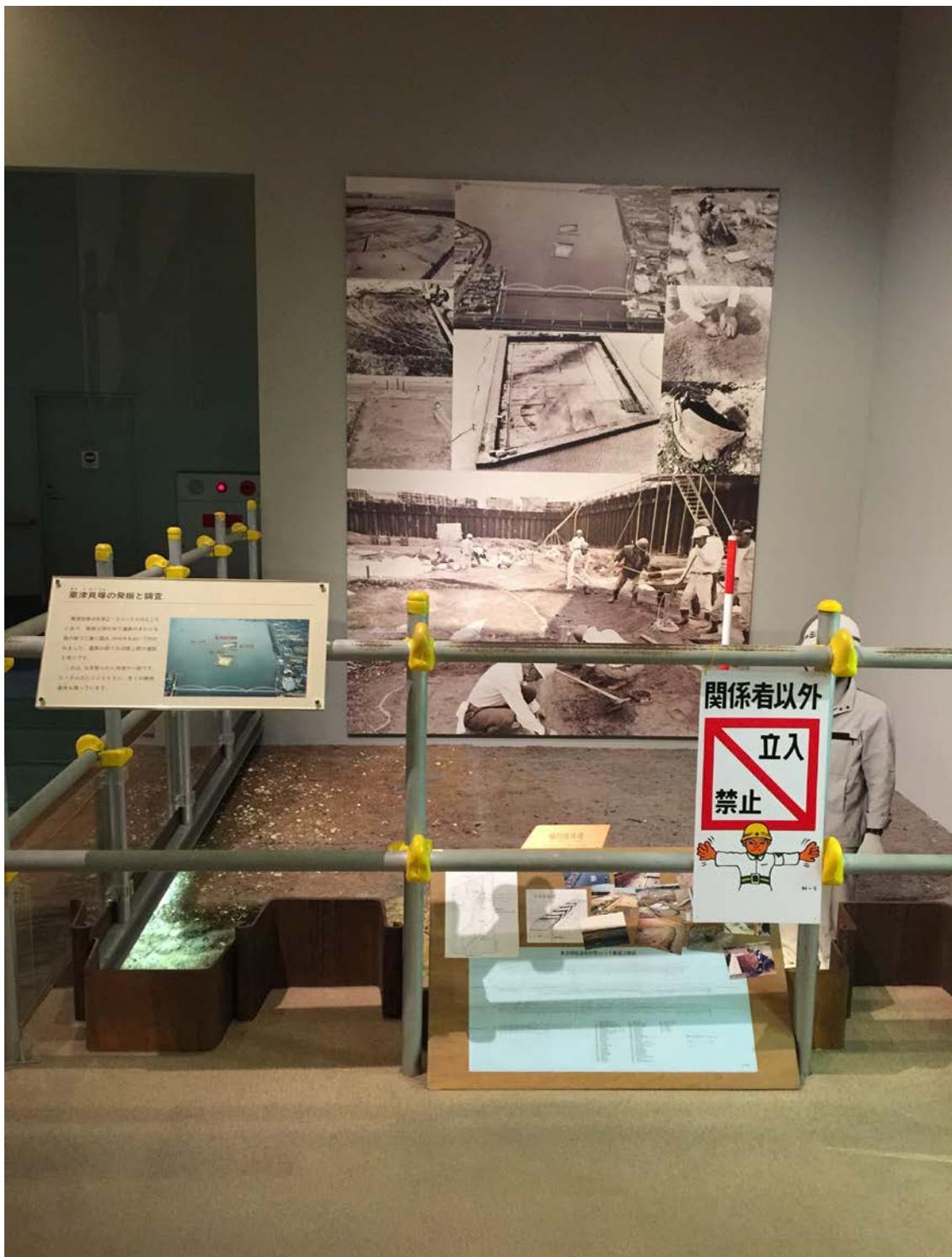
滋賀県立琵琶湖博物館A展示室の「自然史研究室」のうち、哺乳類化石の学芸員のデスクの化石のクリーニング作業のようすの再現展示。(2015年9月15日撮影)



滋賀県立琵琶湖博物館A展示室の烏丸半島のボーリング調査の現場の「プレハブ小屋」の再現展示。(2015年9月15日撮影)

続くB「人と琵琶湖の歴史」展示室には、研究室の再現はないものの、湖底遺跡の発掘現場が再現されています。琵琶湖では、貝塚の遺跡など湖底に数百箇所も見ついている遺跡の調査が重要であり、水深数メートルのところを鉄の矢板で仕切ってポンプで水を抜き、陸上の貝塚と同じように調査するようすがわかるようになっています。B展示室中央にある琵琶湖に特有の丸子船の実物は、この展示ために建造され、進水式を経て湖の上を運行してこの場所までやってきたそうです。この丸子船をめぐっていろいろな情報が端末で見られるようになっていて、どのように展示が作られたのかをしっかりと提示しています。ここでも担当学芸員によって詳しい情報提供 (<http://www.lbm.go.jp/kumi/boats.html>)

がなされています。B展示室には、加えて、蔵を模した展示コーナーがあり、一般来館者が見ることのできない収蔵庫のしくみと役割について解説しています。このような展示も、これだけのスペースを使う例は他に少ないと思います。



滋賀県立琵琶湖博物館B展示室の粟津貝塚の湖底遺跡調査の再現展示。手前左に鉄の矢板が見える。(2015年9月15日撮影)



滋賀県立琵琶湖博物館B展示室の「収蔵庫をのぞいてみよう 一歴史展示の舞台裏」のコーナー。(2015年9月15日撮影)

いよいよ間もなくリニューアルのために閉鎖されるC「湖の環境と人々の暮らし」展示室にやってきました。20年近く前、最初にこの展示室を見た時以来、担当学芸員の顔がしっかり出ている展示として記憶に残っていたのは、まさにこの展示室です。



滋賀県立琵琶湖博物館C展示室の「川の生き物をしらべる」展示のうち、夜間の昆虫採集の方法、ライトトラップの再現展示。担当学芸員の顔がしっかり見える。(2015年9月15日撮影)

夜間に虫を集めるための白い布やライトは実物で、人物はその背景の大きなパネルに写っているのですが、物陰から突然に現れるので驚く来館者が多いと聞きました。この展示の反対側には、写真にあるように、先に説明したA展示室の「湖のおいたちをさぐる」コーナーと同様、研究室が一人分だけが再現展示されています。指示に従い、電話の受話器を取り上げると、学芸員が地域のアマチュア研究者と情報交換や今後の調査の打合せなどをする会話が流れてきます。

パソコン画面で自動再生されているのは、河川の上流部に生息する水生昆虫の仲間の分布標高についての報告の作成の様子の再現動画です。館内のコンピュータ・ネットワークを用いてデータを引き出したりといったプロセスが丁寧に再現されています。この展示が企画・制作されたのは、博物館オープンの1996年10月よりも数か月ないし1、2年遡ることでしょう。世界(!)でインターネットが開通し、ウェブページが実用化したのは、まだ四半世紀も経っていない1991年8月のことです。国内最初のウェブページが作られたのは翌1992年9月で、千葉県庁の公式サイトができたのは1995年と分かれば、館内でコンピュータとコンピュータをつなぐことでどんなことができるようになったのか、そのことを知らせてくたくたくこの展示が作られていることがよく理解できます。

このC展示室には他にも、担当学芸員が1人で、あるいは研究協力者と共に顔がみえるように写真で出ていたりして、また調査のプロセス、研究の経過が、しつこいくらいに展示されています。



滋賀県立琵琶湖博物館C展示室の「川の生き物をしらべる」展示のうち、学芸員の研究室の再現展示。水生昆虫の代表的な種類の標本を双眼実体顕微鏡で観察できるようになっていて、映像がモニターにも表示されるようになっている。水生昆虫の調査・研究に使う薬剤・器具・道具なども一緒に展示されていることがユニーク。(2015年9月15日撮影)

このC展示室は、昭和30年代の彦根市の農村の民家の生活の様子を家と道具ごとそのまま移築展示したことで知られています。この展示の公開後数年の時点で、資料・展示物とその調査の詳細データ、来館者の反応、対応したフロアスタッフの感想などをまとめた分厚い報告書も出版されています(嘉田由紀子・古川彰, 2000)。次回以降で言及しようと思いますが、このような活動を始め、琵琶湖博物館は「展示評価」についても活発です。



滋賀県立琵琶湖博物館C展示室の「農村の暮らし」展示のうち、「カワヤ」＝水まわりの展示。(2015年9月15日撮影)

こうして見てきたように、琵琶湖博物館では常設展示室のいずれにおいても、博物館の研究が、資料収集が、整理保存が、展示が、どんな人によってどのように作られたのか、また行われているのかが大きなスペースを用いて展示されています。これだけのスペースがあれば、より多くの標本・資料を配置することが可能であったにもかかわらず、です。

琵琶湖博物館は、オープンして半年後の1997年3月8日～4月27日に第2回企画展「博物館ができるまで」(http://www.lbm.go.jp/archive/exhibition/special_ex_gallery/detail/s_02nd_19970308_how_to_make_lbm.html)を開催しました。

博物館側の意図は明らかで、博物館ができるまでの活動を、また博物館の日々の調査活動を来館者ひいては県民／一般市民にも体験して欲しい、ということかと想像できます。琵琶湖博物館の設立以来の基本理念 (<http://www.lbm.go.jp/active/index.html>)のうち、

2 フィールドへの誘いとなる博物館

・湖と人の共存について考えるのは当館を利用するみなさん自身です。そして本当の環境との関わりはみなさんの生活や地域にあります。みなさんの興味が博物館の中だけで終わるのではなく、生活や地域などのフィールド（現場）に向かいたくなるような展示や体験プログラムを提供しています。

を強く意識したものであることが分かります。

琵琶湖博物館が常設展示で伝えようとしているのは、滋賀県の自然や歴史、そこでの生活のモノやコトだけではありません。それらモノやコトがフィールド（現場）から博物館の展示となるまでのプロセスと、そのプロセスには学芸員を始め多くの人々が関わっていること、さらにそのプロセスに見学者／県民・一般市民にも加わってほしいというメッセージを含みます。このような展示は、国内ばかりかもしかすると世界レベルでもユニークな展示ではないかと考えます。みなさんがこれまで見た様々な博物館の展示と比べてみてください。

冒頭に述べたように、琵琶湖博物館のC展示室は2015年11月8日まで、他のA・B展示室も2、3年でリニューアルのために閉鎖されます。ぜひ今のうちにご自分の目で確認なさることをお勧めします。

今回は「顔が見える」展示の例として、滋賀県立琵琶湖博物館の間もなく閉鎖される常設展示室を見て、それが「フィールドに誘う」展示だとわかりました。次回は、学芸員・研究員の「顔が見える」もう一つの例として、林原自然科学博物館（1992～2014）が2002年～2006年に実験的に設置した展示施設「ダイノソアファクトリー」を見ていきたいと思います。そしてその後に、なぜ「顔が見える」展示が例外的で少ないのかを考えようと思います。

◆引用文献・参考文献

嘉田由紀子・古川彰. 編. 2000. 生活再現の応用展示学的研究 ―博物館のエスノグラフィーとして. 琵琶湖博物館調査研究報告 第16号. 326p.

鮫島泰平・清田真由美. 2000. (1) それは展示計画から始まった. 川那部浩哉 編著. 博物館を楽しむ ―琵琶湖博物館ものがたり. p.96-105. 岩波ジュニア新書. 岩波書店, 東京.

注：博物館の専門職員＝学芸員についての呼び方は組織により、また人により一定していません。滋賀県立琵琶湖博物館ではこのように呼んでいます。

個々に表示していませんが、今回の本文に表示したウェブサイトはいずれも2015年9月下旬に確認したものです。